

# 普遍、エイドス、個

濱 岡 剛

アリストテレスは『形而上学』Z巻の実体論に於いて、普遍 *to katholou* は実体 *ousia* ではないと主張しています。しかし、その一方で、種とも形相とも訳されうるエイドスあるいは本質 *to ti ēn einai* を「第一実体」としています。これらは普通に考えれば普遍的なものですから、アリストテレスは矛盾したことを言っているように見えます。しかし、私達はそれを単に矛盾と断定する前に、そもそもアリストテレスの言うエイドスというものが普遍や個に対してどういう関係にあるのか考えてみる必要があるのではないのでしょうか。本発表は、普遍の実体性を問題としているZ巻13章がZ巻全体の議論の流れの中でどういう位置を占めているのかという事を考慮しながら、13章の議論を再検討し、その事を通して、アリストテレスのいうエイドスが普遍からも個からも区別され、それ自身で独自の位置を占め、その両者の謂わば根拠になっているものであることをなしうる限り明らかにする、ということを意図するものです。なお、本発表では考察の範囲を『形而上学』の中心的部分を占めているとされているZ巻からΘ巻、特にZ巻に限定して考察を進めたいと思います。

さて、普通『形而上学』を問題とする場合、エイドスは「形相」と訳されることが多いと思いますが、本発表の題目では「形相」という訳語を用いませんでした。それは、「種」というエイドスの持つもう一つの意味も実体論において重要な意味を持っているからです。もちろん、「形相」の対立概念は「質料」であり、「種」の対立概念は「類」である事からも分かるように、それぞれ異なる場面で用いられるものであり、具体的にテキストにおいてそのいずれの意味で用いられているか判断に迷うことは殆どありません。しかし、Z巻では形相と種とが、謂わば同じ一つのものの裏表であるかのように用いられており、そのいずれの意味でもエイドスは実体として認定されています。特に後者の「種」という意味でのエイドスについてみると、たとえば4章では本質は第一義的には実体についてのみあるということが言われているのですが、

同時に「本質は類の種以外の如何なるものにも存しない」(1030a11-13)とも言われています。そして、今問題としようとしている Z 巻 13 章の直前の 12 章では究極の種つまり「人間」とか「馬」とかいった「最下位の種（不可分の種）」 *infimae species* が実体（ウーシアー）であるとされています。これはアリストテレスの生物学的なものの見方に基づくものでしょうが、普遍との関係で特に重要なのはこの「種」という意味でのエイドスであり、13 章から 16 章において「普遍的に語られるものの如何なるものも実体ではない」（Z 16.1041a3-4）と主張される時、その「普遍的に語られるもの」の内に種は含まれるのか、ということが解釈上問題となっています。

ではまず、問題の 13 章の内容を具体的に見ることにしましょう。

普遍が実体（ウーシアー）ではないことの根拠としてまず、「各々のものの第一実体というのは、その各々のものに固有で、それ以外のものには属さないものであるが、普遍はそれらに共通なものである。すなわち、本性的に複数のものに属するものが普遍と呼ばれるのである」（1038b9-12）ということが言われ、さらに加えて、「実体と呼ばれるものは、基体 *hupokeimenon* について語られないものであり、他方普遍は常に、基体について語られる」（1038b15-16）とされています。これらの言葉からするならば、類も種も（そして勿論性質なども）一まとまりにして普遍の実体性が否定されているように見えます。しかし、議論はこれで終わっている訳ではありません。アリストテレスは、普遍を実体とする論者たちがこのアリストテレスの主張に対して一歩譲歩して、本質と同じレベルで普遍が実体であるとは言えないにしても、「動物」が「人間」や「馬」の定義のなかに含まれているように、本質の中に含まれている限りに於いて普遍もある意味において実体であると言えるのではないかと主張する場合を想定しています。勿論この主張は退けられるのですが、その論証の過程においてアリストテレスは明らかに「人間」といった種が実体であることを前提にしており、そしてその上でその定義の構成要素となる「動物」といった類はやはり実体とは認めがたいと主張しているのです。たとえばこう言われています。「総じて、もし《人間》やそれと同様の仕方で語られるものどもが実体であるなら、その定義 *logos* に含まれているものはいずれも如何なるものの実体でもなく、またそれら（つまり《人間》など）から離れて別に存在することもなく、それら以外のもののうちにあることもないであろう。たとえば、《動物》が或る特定の種の動物とは別に存在することはなく、

特定の種の動物の定義に含まれる他の如何なるものも、それとは別に存在することはないのである。」(1038b30-34)

この引用からも明らかなように、アリストテレスは、普遍の実体性を否定することによってエイドスの実体性が損なわれるようなことはないと考えています。このように考え得る根拠は一体どこにあるのでしょうか。様々な解釈者がこの問題に取り組んでいますが、最近の研究を見ると、大雑把に言って、二通りのパターンにまとめることができます。一つは、アリストテレスは個別形相という考えを持っていたとするものであり、もう一つは、「人間」といった「種」が「ソクラテス」といった個体の個性と特別密接な関係を持っているという点から説明しようとするものです。このいずれの解釈もそれぞれ、アリストテレスのエイドス概念の重要な一側面を明らかにしているように思われます。

ではまず、この内の第一番目の、アリストテレスは個別形相という考えを持っていたとする解釈について見てみたいと思います。勿論形相がそれ自身で完全に個別的で、たとえばソクラテスがそれによって他の者から区別されるようなものをアリストテレスが想定していたと考えるのは困難ですし、そのような意味での個別形相を主張する者も（少なくとも最近の論者では）いないようです。個別形相を主張する論者はむしろ、たとえば「人間」という種がある特定の質料において、数的に異なるものとして実現しているが故に形相は個別的であると主張しているのです。確かに、アリストテレスはエイドスが個体から独立に存在することを否定し、まさに個々のものにおいてエイドスが完全に実現していると考えているのですから、この説はアリストテレスのエイドス概念の重要な一側面を強調したものであると言えるでしょう。

このことは、我々の思惟 *noein* が具体的にどのように成立しているかということについてのアリストテレスの説明とも対応しているように思われます。アリストテレスは、『記憶と想起について』という著作の中で、思惟に表象像 *phantasma* が必要であることを、幾何学において作図を行う場合を類比的な事例として挙げて説明しています(1. 449b30-450a7)。すなわち、三角形について何かを証明しようとする時、特定の大きさの三角形を描きながら、その三角形が特定の大きさを持つ点は考慮に入れないように、我々が思惟する場合にも特定の大きさや性質を持った表象像を思い描きながら、その特定性を捨象して考えるのであると説明しています。つまり、何か普遍的なものについて考える時でもそのものの特定の事例を用いて考えていると言うの

です。つまり、思惟において私達は特定のものを一般的なものの謂わば代表者として用いていると言うのです。但しそこで言われる特定のものは現実存在する特定の個体である必要はありません。たとえば、建築家が家を建てようとする場合、具体的な特定の家を頭の中で思い描きます。しかし、それはまだ現実化していないのですから、特定の個体とは言えません。もしかすると未完成のまま終わるかもしれないものです。そのような建築家の頭の中にある具体的な家のプランもアリストテレスによれば「家」の生成に先立って存在するエイダスです。その意味で、個別形相を想定する立場を採るにしても、その「個別」ということには多少の補足説明を加えておく必要があるでしょう。すなわち、それは何か普遍的なものの代表者という役割を担った個別的なものであり、それ故他のものと交換不可能な個別なものではありません。そしてそれ故、実際に家を建てる事は形相（エイダス）を作ることではないと言われうるのです。

さて、個別形相を想定する論者たちは、アリストテレスの考える実体形相が実は個別的なものであることを指摘することによって、2巻13章でなされている普遍の実体性を否定しようとする議論を形相は免れていると主張するのですが、彼らは共通してエイダスの「種」としての側面を軽視しています。たとえば、A.C.Lloydは、「エイダスという一つの言葉が、普遍であることも普遍でないこともありうる《形相》にも、もっぱら普遍的である《種》にも用いられている。しかし、このことによって事柄が曖昧になることはない。なぜなら、種は普遍的形相に外ならず、これは個別形相を精神によって一般化したもの（the mental generalisation）に外ならないからである。」(1)と説明していますが、これはアリストテレスが実際に種を実体として認めていることと合わないように思われます。13章で「人間」に対してその「人間」の定義の構成要素の実体性が問題とされる時、その「人間」は個別形相としての「人間」なのでしょう。やはり、種としての「人間」が念頭にあると考えるべきではないでしょうか。なお、Lloydの主張についてもう一言コメントを加えておくと、彼は普遍が抽象的なものであることを強調し、それ故普遍は実体でありえないと主張していますが、確かに結果的にはそうなのでしょうが、アリストテレスが普遍の実体性を否定する際に根拠としているのはそのようなものではありません。アリストテレスは実体論において（そしてこれは実体論の場合に限定されるものではないと思いますが）現に我々に現れているその現れ *phainomena* そのものを吟味することによって探究を進めているのですから、心的抽象を受けているか否かということは二義的なものであると思わ

れます。

従って、個別形相という考えはエイドスの重要な一側面を明らかにしているという点で有益ですが、それだけではアリストテレスのエイドス概念を説明するものとしては不十分で、13章の議論に十分則していないように思われます。では、13章の（普遍の実体性を否定する）議論がエイドスの実体性を損なうものではないことを説明するもう一つの解釈の方向はどうでしょうか。それはM.J.Woodsが主張したもので、「種」の個体に対する特権的な地位を強調するものです。彼はエイドス「人間」が人間の個体化の原理を我々に与えているのだとし、こう説明しています。「人間を構成する一片の質料が互いに区別されるのは、もっぱらそれが形相《人間》を持っているということによってである。私が対象の複数性について語るためには、その集合のメンバーの各々を互いに区別する手だてを必要とし、アリストテレスによれば、私はこれを質料において或る形相が現れていることを認識することによって為している。従って、私が対象を真に複数のものとして考えるためには、その前に既に、そのものを形相を持っているものとみなしていなければならない。」(2)

このWoodsの主張の中で、エイドスが個体化の原理であるという点については問題があるかもしれません。しかし、このWoodsの説明は確かに我々が個体を把握する際の前提となっている事を明らかにしてくれています。例えば、単なる煉瓦の山は「家」ではなく、ある特定の相貌を持って煉瓦の固まりが現れているのを見ることによって私達は「ここに一軒の家がある」と言ったり、幾つかの煉瓦の固まりに対して「四軒でも二軒でもなく三軒の家がある」と数えたりすることができるのです。また、『トピカ』において「もし何かがその種から別のものに全く変化するなら、それはもはや同一のものとしてとどまることはできない」(Δ5. 125b37-38)と言われているように、個体の同一性に対して「種」としてのエイドスは重要な意味を持っています。しかし、Woodsは13章のテキストに則して「種」を擁護するために、エイドスをも含めた「普遍」to katholou とエイドスを含まない「普遍的に語られるもの」to katholou legomenon とが用語として区別され、その実体性が否定されているのはもっぱら後者の「普遍的に語られるもの」であると主張したため、多くの批判を受けました。確かにテキスト上そのような区別を見い出す事は不可能であり、その意味でWoodsの主張は不完全なものです。しかし、もう一度13章のテキストを見直してみると、別の方向からWoods 説を救う道があるように思われます。

そもそも普遍が実体 *ousia* でないことの根拠は、各々のものの第一実体は「その各々のものに固有なもの (*hē idios hekastai*) で、それ以外のものには属さないもの」(1038b10) であるのに対し、普遍はそれら各々のものに共通なものであることにありました。その場合、そこで言われている「各々のもの」 *hekaston* は単純に「個物」 *an individual* (Ross 訳) を指していると考えられがちですが、G.E.L.Owenを中心とするLondon Groupが指摘しているように、これを「人間」といった種を意味すると解することもできます。この「各々のもの」というのは「その本質 (*to ti ēn einai*) が一つであるもの」(1038b14-15)なのですから、その可能性は十分あります。次に、ここで言われている「各々のもの」をそのように「各々の種」と解しても不自然ではないことをZ巻の議論全体の流れの中で明らかにしたいと思います。

Z巻全体のテーマが「実体とは何か」 *tis hē ousia* (1029b4)ということであることは言うまでもありませんが、アリストテレスはその探究を如何にして遂行しているのでしょうか。たとえばOwen(3)はZ巻で問題とされているのは個体指示の問題であるとしています。しかし、「第一義的に有るもの」である実体の探究をそのように個体指示の問題に還元することはできるでしょうか。もし個体指示が問題であるなら、個体の実体性は予め前提されていることになりますが、それならばZ巻の議論は論点先取の議論になってしまいます。従って、少なくともその出発においては個体—Z巻の用語で言えば *to sunolon* —も実体の候補の一つにすぎないはずで、勿論個体はアリストテレスにとって重要な意味を持ちますし、ある意味で我々にとってもっとも明らかなものです。また、イデア論批判においても、イデアが個体から離れてあることが論点の一つになっています。けれども、それは個体を絶対的なものとして立てた上で、普遍たるイデアを否定しようとするものではなく、(少なくともアリストテレスが理解した限りでの)イデア論によれば普遍がその離在性によって個体と同じレベルのものである事になり、所謂「第三の人間」のようなアポリアが生じてしまう、というイデア論に内在する論理の矛盾を突こうとするもので、真実在の探究においては個体もその実体としての地位は留保されていると考えるべきでしょう。

では、アリストテレスは何を実体の徴表(メルクマール)と考えて探究を進めているのでしょうか。Z巻における議論の展開に則して確認してみたいと思います。

まず第一に取り上げられるのはヒュポケイメノン(基体) *hupokeimenon* であると

いう事です。そしてヒュポケイメノンであると考えられるものには質料 *hulē*、形相 *morphē*、*eidos*、およびその両者から成るもの（すなわち個体）とがあるとされ、特に「基体について語られず、むしろ他のものがそれについて語られるところのもの」（1029a8-9）という実体の規定のみから実体を捉えようとする、質料が実体であることになると言われています。この議論では、「何かについて何かを」 *ti kata tinos* 語るという形の言明において主語と述語は別のもので、主語となるものは述語とは独立に同定可能なものでなければならないという述語理論が前提されています（cf. Γ4. 1007a20-b18）。従って、たとえば「人間は二足歩行の動物である」という定義文は「何かについて何かを」語るという（厳密な意味での）述語づけとは見なされません。つまり、述語となるものは主語にとって付帯的なものであり、変化の説明において同じ「基体（ヒュポケイメノン）」という言葉が重要な意味を担わされて使われているのもこの述語理論に基づいています。つまり、基体がまず基に措定された上で、それに対して謂わば着せ代え人形のように様々な属性を着せ代えてゆくのがアリストテレスの言う述語づけであると言ってもいいでしょう。アリストテレスは謂わば思考実験によってこの様な基体の性格のみを徹底させ、属性となりうるものを、つまりまず性質を、そしてさらに長さ、幅といった（幾何学的）量をも取り去ってしまうなら、それ自身では何者でもない、否定的規定すらも受け入れないカオス的な状態の質料しか残らない事を示します。このような質料をなお実体と呼ぶことはもはや出来ません。なぜなら、それは実体のさらなる徴表である「分離独立している」 *chōriston* ということと「或る此のもの」 *tode ti* ということをそれは満たしていないからです。

そして、この点からエイドス（形相）と形相と質料の合成物 *to ex amphoin* が質料よりより一層実体であると言われるのですが（Z4. 1029a26-30）、この徴表はどういう事を示そうとしているのでしょうか。通常この *tode ti* は「感覚個体」を指していると考えられます。先に述べた個別形相説も、形相がしばしば *tode ti* であると言われていることを根拠の一つとしています。『カテゴリーアイ』では確かにそのように「個体」を指すものとして用いられています。しかし、『形而上学』では個別性を示す語として *kath' hekaston* という語があり、これはエイドスについては用いられません（但し、『動物部分論』A巻に於ける動物分類学のような、はじめから個体が問題とならないような場面(4)ではエイドスについても用いられます）。イデア論批判においてイデアの離在を言う場合でも、*to kath' hekaston* からの離在は言われ

ていても、*tode ti* からの離在は言われていません。従って、この二つの言葉は、同じものを指しうるにしても、基本的には別の事を表していると考えるべきでしょう (cf.  $\Lambda 3$ . 1070a11-12)。アリストテレスが実体論において、*tode ti* という述語によって示そうとしているのは、我々が具体的に何かを語ろうとする際に、最も確実な事実として基礎に措くことのできる、それ自体として単一なものです。それは「これは何であるか」という問いに対する最も的確な答えとなるものです(5)。それ故に *to de ti* が *to ti estin* と当然のように並列的に用いられ得るのです ( $Z 1$ , 1028a11-12)。私達が何か、つまり基体 *hupokeimenon* について語ろうとする時、その何かとして基に措定するものは常に何か確定した或る具体的なものでなければならず、無規定な *aoriston* 質料を基体として措定するのは机上の空論にすぎません。また、ここでの「分離独立」*chōriston* という語も同様の事を指し示しているように思われます。そして、このような徴表を持つとされたエイドスと個体の内、後者の個体は「より後なるものにして明らかなもの」 ( $Z 3$ . 1029a31-32)であるとされます。勿論このことによって個体の実体性が否定された訳ではありませんし、 $Z$  巻では積極的に個体は実体ではないと明言している箇所はありますが、アリストテレスの実体論は少なくとも個体を絶対的な基準とするものではないことは明らかです。

次にアリストテレスが実体の徴表として挙げるのは「本質」*to ti ēn einai* であり、それは第一義的には実体についてのみあると言われます。本質は、「まさに何か或るものであるもの」*hoper ti* として単一なるものについてあり、しかもそれが何かについて分有という仕方で語られるような属性ではない自体的なものを明らかにするものです。そして、アリストテレスは本質は実体あるいは種についてあると述べるにとどまらず、さらに各々のものの本質は（それ自体として語られるものの場合）その各々のものと同一であると主張し、まさに本質が実体であるという見解へとつなげます。その場合その「各々のもの」*hekaston* というのは、質料と結びついた具体的な個体ではなく、第一実体すなわち個体において実現されているエイドス、すなわち所謂内在形相 *to eidos to enon* です。たとえ「カリアスの本質」というものを考えるとしても、それはカリアスが他の誰でもないカリアスである限りにおいて彼に属しているものではなく、むしろカリアスの本質は彼が人間という「種」に属するものである限りにおいて彼に属しているものなのです。 $Z$  巻の本質論では種ということがむしろ基本になっています。その事を端的に示しているのが12章の議論です。

そこでは定義の構成要素となっている類と種差の関係が基体－属性（主語－述語）のような関係ではなく、質料－形相のような密接な連関を有していることが指摘され、さらに、類やより上位の種差を前提し含意している「究極の種差」 *hē teleutaia diaphora* つまり「最下位の種（不可分の種）」が実体であると言われています。このような定義の一性についてはH巻6章でも扱われ、そこでは可能態－現実態の関係で説明されています。つまり、「人間」の構成要素である「動物」は可能的に「人間」なのであって、それ自身としては現実態ではないということです。ここでは既に定義の関わるものが「種」であることが前提されています。各々の個体に固有な仕方で属しているエイロスというようなものはここでは問題になりません。種を種として取り扱うからこそのような定義の一性 *Einheit* が問題となるのです。

そしてまた、この12章においてこのように定義の一性が問題とされているのは、本質のロゴス化である定義が複合物であるかのような外観を呈しているのに対し、実体の単一性を保持せんがためです。第一実体たるものは「合成されていない実体」 *hai mē sunthetai ousiai* でなければなりません。それ故、定義の構成要素がそれ自体として実在性を持ち、たとえば「人間」を、「二本足」と「動物」がまずあって、それが単に結合しただけの集積物 *sōros* と解することはアリストテレスにとって容認しえないことです。実際また認識という点においても、「人間」といった「最下位の種」 *infimae species* がより先であり、普遍の認識の出発点になっています（*An.Post.* B19. 100a15-b5）。13章の議論は直接このことに結びつくものとしては導入されていませんが、やはりこの問題が念頭にあると言ってよく、普遍の実体性を認めると実体がそれとは別の現実態としてある実体から合成されていることになるとして強く反対しているのです。「手」が生物とは独立に存在しえないように、「動物」も「人間」など特定の種の動物から離れて独立に存在せず、あくまで可能態に於いて「人間」などの実体であるにすぎません。このような13章での議論の背景を考慮するならば、単にアリストテレスの言う形相は個別形相だから、と言うだけはこの章の議論の説明としては不十分であるように思われます。第一実体が「各々のものに固有で、それ以外のものには属さないものである」（1038b9-10）と説明される場合にも、そこで言われる「各々のもの」としては個体ではなくむしろ「種」のことが念頭にあったと考えるべきであり、そう考える時（普遍の実体性を否定せんとする）13章の議論がZ巻の実体論において占める位置も明確になると思われます。

他方また、『形而上学』Z巻においては、実体 *ousia* としては基体 *hupokeimenon* となり、なおかつそれ自体で確定したものが求められているのですから、その「何であるか」 *to ti estin* を語ることはできないような、不確定な要素を含んで孤立した個体を第一の実体として立てる訳にはいきません。Schmitz が述べているように、エイドスは「感覚世界の不定の海に浮かぶ最も明らかな確定性の島」(6)であります。私達は個体を把握する場合でもまず、それが或る特定のまとまりのある性質を持つてあるということに着目します。他の個体から絶対的に区別されたある持続的なものとしての個体を把握することができるのは後になってからであり、それがいささか不確定な面を含んだものです。或るエイドスがそこに一個の或る何かとして現前しているのが全ての基本となります。それをまさに個体として扱うことも可能でしょうが、我々にとって差し当たって確実なのは、たとえばそれが「人間」であるということであり、その単なる「人間」という現れでもってそれを「ある特定の個人」の把握と考えるのは二次的な反省作用の結果ではないでしょうか。「認識において第一なるもの」 *prōton gnōsei* は或る特定化された個体ではなく、或る「種」の代表者という資格での個体、つまり、エイドスの現前であると考えべきです。

普遍—個別という対比はアリストテレスにおいてはある意味で相対的なものですから、普遍、エイドス、個という三項関係の謂わば中間に位置するエイドスも、そこから二項だけ取り出して考えられた場合には普遍 *to katholou* とも個 *to kath' hekaston* とも言われうるものですが、最終的な場面ではその両者とも区別された独自の位置付けがなされていると考えるべきでありましょう。

(注)

- (1) A.C.Lloyd, Form and Universal in Aristotle, Liverpool 1981, p.10. 個別形相説を採る代表的論客としては、他にM.Fredeを挙げることが出来る。M.Frede, "Substance in Aristotle's Metaphysics", in A.Gotthelf(ed.) Aristotle on Nature and Living Thing, Pittsburg 1985, pp.17-26; M.Frede & G.Patzig, Aristoteles 'Metaphysik Z', 2 vols. München 1988. Cf. M.Woods, 'Particu-

lar Forms Revisited' in Phronesis 36(1991),pp.75-87 (これは後者の書評である)。

- (2) M.J.Woods, "Problems in Metaphysics Z, Chapter 13", in J.M.E.Moravcsik (ed.) Aristotle : a collection of critical essays, Garden City 1967, p.237.
- (3) G.E.L.Owen, "Particular and General", in Proceedings of the Aristotelian Society 79(1978/79), p.2.
- (4) De Partibus Animalium, 639b5, 644a30.
- (5) 濱岡剛「アリストテレスの実体論における<トデ・ティ>の意味」『関西哲学会紀要』第24冊(1989年度) p.28-33.
- (6) H.Schmitz, Die Ideenlehre des Aristoteles, I-1. p223.

(付記) 本論文は、第43回現代哲学研究会(1987年12月13日)において口頭発表したものの原稿である。tode tiに関する記述を一部改めた以外は、特に手を加えなかった。

長い間これを活字化しなかったのは、この発表内容をつまらないものと考えたからではなく、むしろ逆に重要なものであると考えたが故に、個々の論点を補強した上で、将来より完全な形でこの発表におけるテーゼを提示したいと考えていたからである。この発表に対して、研究会の後で山口義久氏から詳細な御批判の手紙を頂いた。この発表原稿を活字化して公にする以上は、当然その批判に何らかの形で答えておく必要があると考え、すぐに発表することはせず、結局今日まで至ってしまったしだいである。関西哲学会第41回大会において「アリストテレスの実体論におけるトデ・ティの意味」という題で発表を行ない、山口氏の批判の論点の一つに対して私なりの答えを提示した。もちろん、まだ論ずべき論点は数多く残っている。しかし、その後形而上学以外のテーマに手をつけ、それに決着をつけられないままに時間が過ぎていき、結果的に実体論の問題を等閑にしてしまった。本来ならばこの発表原稿はまだ公にされるべき段階にないと言えるし、また公にするならば全面的に書き改めるべきものである。したがって、この論文は、『ヒュポテシス』という新しい雑誌の名称の通り、アリストテレスの実体論に関する私の基本的立場ないし仮説(ヒュポテシス)を提示したものと理解されたい。

参考文献（初出年代順）

- W.D.Ross, Aristotle's Metaphysics, Oxford 1924
- J.Owens, The Doctrine of Being in the Aristotelian 'Metaphysics', Toronto (1st ed. 1951) 3rd ed. 1978
- M.J.Woods, "Problems in Metaphysics Z, Chapter 13" in J.M.E.Moravcsik (ed.) Aristotle : a collection of critical essays, Garden City 1967 pp.215-238
- J.H.Lesher, "Aristotle on Form, Substance, and Universals : A Dilemma" in Phronesis 16(1971) pp.169-78
- G.E.L.Owen, "Particular and General" in Proceedings of the Aristotelian Society, 79(1978/79) pp.1-21 and Logic, Science and Dialectic, London 1986, pp. 279-294
- M.Burnyeat & others (edd.), Notes on Zeta of Aristotle's Metaphysics, Oxford, 1979
- G.E.L.Owen, "Prolegomenon to Z 7-9" in Ibid. pp.43-53
- G.J.Hughes, "Universals as Potential Substance : The interpretation of Metaphysics Z 13" in Ibid. pp.107-126
- R.Heinaman, "An Argument in Metaphysics Z 13" in Classical Quarterly 30(1980), pp.72-85
- A.C.Lloyd, Form and Universal in Aristotle, Liverpool 1981
- M.Burnyeat & others (edd.), Notes on Eta and Theta of Aristotle's Metaphysics, Oxford 1984
- R.W.Sharpley, "Form in Aristotle—Universal or Individual?" in Ibid. pp.26-31
- M.Frede, "Substance in Aristotle's Metaphysics" in A.Gotthelf(ed.) Aristotle on Nature and Living Thing, Pittsburg 1985, pp.17-26
- H.Schmitz, Die Ideenlehre des Aristoteles, Bonn 1985
- M.-T.Liske, Aristoteles und der aristotelische Essentialismus, München 1985